

共生社会の実現に向かう特別支援学校のセンター的機能の在り方 ～気軽に相談できる教育相談となる「笑顔と対話」～

新潟県立佐渡特別支援学校

校長 川沼 正憲

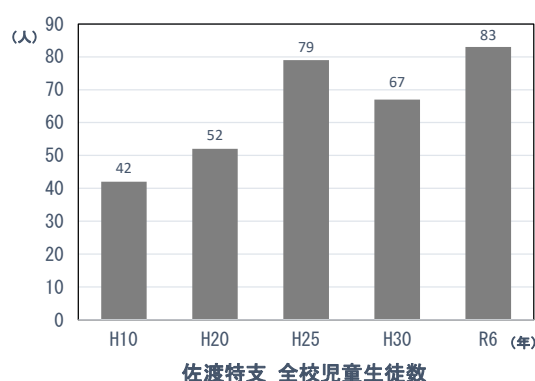
1 はじめに

当校は、佐渡島内唯一の特別支援学校である。主に知的障害児を対象としているものの、肢体不自由、病弱、情緒障害等を併せ有する児童生徒も通っている。遠くは旧小木町から1時間半かけてバス通学をする高等部生がいたり、小中学部生は、保護者の送迎等が基本でそれ相当の時間や労力をかけたりして旧新穂村までの登下校となっている。

また併設されている新星学園（福祉型障害児入所施設）があり、通学の関係や諸事情で利用している児童生徒がいる。渡り廊下でつながっていて新星学園との連携も図っている。

少子化の波は、佐渡地区も押し寄せ近年も統廃合が続いている。そんな昨今、特別な支援が必要な児童生徒数は右肩上がりに増えて特別支援教育にニーズは高まっている。（右の表）当校の児童生徒数も高等部3学年そろった平成11年度は全校で42名、25年後の令和6年度は83名と25年で倍になっている。

（下の表）



佐渡島内小中学校での特別支援学級の数・人数とも増加傾向は同じで、担当する教師側の専門性を高めることが課題となっている。そこで当校では、もともと共生社会の実現に向けて実践の一つであるセンター的機能の在り方について、地域の各校での困り感を特別支援学校に気軽に相談できるように実践してきた「笑顔と対話」について述べる。

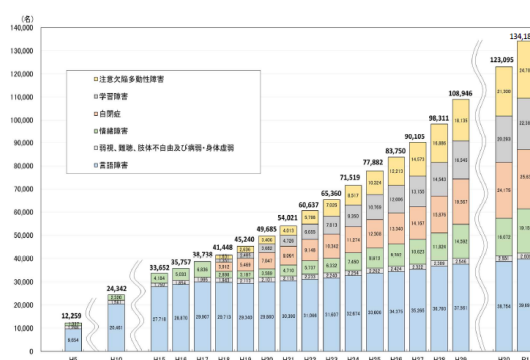
2 特別支援学校のセンター的機能について

文科省が様々なガイドラインや報告書では以下の

ような機能が挙げられている。

- (1) 専門的支援の提供：障害のある子どもへの個別支援や指導を行う。
- (2) 地域の学校支援：一般の学校へのコンサルテーションやアドバイスをを行い、特別支援教育の充実を図る。
- (3) 研修・啓発活動：教員や保護者への研修や説明会を行い、特別支援教育に対する理解を深める。
- (4) 情報の集約・発信：障害に関する情報や教育の事例を収集・発信し、地域の教育的ニーズに応える。

通級による指導を受けている児童生徒数の推移（各年度5月1日現在）



上の表は通級による指導を受けている児童生徒数となっているが、これが通常学級在籍で発達障害と呼ばれるADHD等、自閉症等の人数が増えてきていることを示している。

教育的ニーズのある児童生徒は増えて、対応する教師の絶対数が不足、専門性や経験不足のまま指導せざるを得ないケースが多い。

そこで当校では、共生社会の実現に向けて『笑顔と対話』とともにセンター的機能の充実へ向けて上記の（1）から（4）について取り組んできた。各校の困り感があるときに「相談したいけど誰に、どうやって相談すれば？」と保留のままのケースも多い。その際に担当者や管理職が「特別支援の相談は、特別支援学校へ聞けばいいんだ！」と選択されるようにする実践を積み重ねてきた。

3 具体的な実践の内容

(1) 「気軽に当校へ！」と告知・周知を図る

校長の挨拶の機会を告知の場とする

佐渡地区では、佐渡市小学校長会、中学校長会主催の春の総会・佐渡市内新任転入校長歓迎会が行われた。県立の佐渡特別支援学校であるが、来賓として招待され挨拶する機会に恵まれた。

ここぞ！とばかり、「当校は県立の特別支援学校ではありますが、佐渡島内の子どもたちが対象です。どうぞ、各校の特別支援関連の困りごとは特別支援学校の当校へ電話一本お寄せください。」と呼び掛けた。

佐渡市内の関連会議に校長として出席する機会も多い。関連機関が連携を取って取り組まなければスムーズに進まないことも多く、その際に「笑顔と対話」を意識して会議に臨んだ。ただ現状を非難して改善を求めるのではなく、「今まで気づかなかったことを一緒に対話して進めていきませんか！？」というスタンスで努めて明るく、発言してきた。以下は春からの出席した関連会議

ア 就労・生活支援定例会議

イ 地域自立支援協議会

ウ 要保護児童対策協議会（要対協）

エ 佐渡地区県立校長会議（高等学校）

オ 地域の子育て支援者研修会

カ 任意の教職員研修会

ポイントは、明るく「笑顔と対話」を心掛けた。そこには、安心と信頼がスムーズに推進されると実感している。会議によっては、懇親会付きもあり、より「笑顔と対話」が進み、相談者側のはじめの一步が踏み出しやすくなっていた。

(2) 困りごとを「喜んで！」受ける

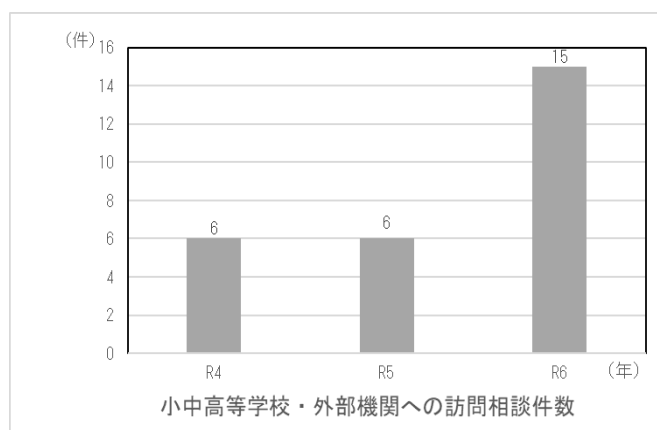
春から上記アからカを継続的に取り組んでいると6月頃から特別支援関連の困りごとの依頼が電話で来るようになってきた。日程調整をして、一番最短で実施できる日に設定した。それは、いち早く対応して良い変容が見られると、次々と波及することを期待してである。

1件目の小学校低学年の学級の相談で、「学級崩壊状態で学校としても困っています！」の相談に、受ける側は「喜んで！」の気持ちを言動で表した。実際の教室や児童の様子を見せてくださいとお願いして、6月中に学校訪問をして、実態把握に努めた。子ども

たちは、お客さんに参観されると普段よりいい子になることが多く、その日もみんなが頑張っていた。

授業後、担任など校長先生を含め、実態としての困り感を相手側に寄り添って傾聴した。担任の先生の「言っていることが、通じなくて・・・」切ない心情が読み取れた。その困り感を少しでも、専門性を発揮し先生方の心を軽くするべく特別支援学校側は、大丈夫です、喜んで相談に乗ります、と対応し、終わる頃には困り果てている担任の先生に笑顔が見られた。

以下の表は、令和6年度の春より本実践を取り組むことで変化した、相談件数の推移である。



有り難いことに、夏休みを中心に以下のように依頼を受けたり、研修会を主催したりした。

ア 小学校低学年学級全体の指導

イ 地域支援者向け愛着形成・障害の講演

ウ 小学校発達障害等の校内研修講師

エ 小学校発達障害等の校内研修講師

オ 大学教授講演研修の主催

カ 地域外部講師の校内研修の主催

キ 中学校・高校のCO研修の主催

ク 中学校個別支援会議の参加

ケ 中学校生徒指導主事部会の特支研修講師

コ 佐渡地区特支研修講師

サ 中学校校内研修講師

シ 高等学校1年全体の指導

ス 中学校特別支援学級全体の指導

セ 中学校特別支援学級1年の指導

上記のアからサが6月のうちに依頼があつて7月から夏休み中に実施し、シからセは夏休み中の実績から波及した効果と思われる。

(3) コンサルテーションはニーズに合わせる

上記の依頼としてくる困り感は、圧倒的に最近の発達障害等からの集団不適応や不登校などの対応がほ

とんどである。そのニーズに応えるためには、こちら
も適切で確かな情報を相手に伝え、相手が相談して良
かったと、実感しなければならない。

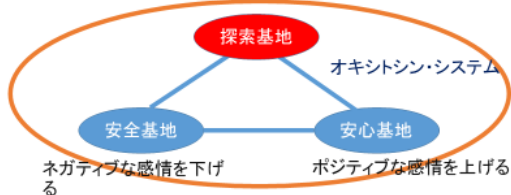
そのために自己研鑽を積み、以下の情報を提供す
るようにした。

- ア 愛着形成・愛着障害からくる発達障害とは
- イ 脳機能の視点における発達障害の対応
- ウ 中卒・高卒後の進路指導
- エ 共生社会に向けた「笑顔と対話」

特にアについては、自分自身が医師の講演に目か
らウロコが落ちる思いをし、その医師には、当時の勤
務校で同様の講演を依頼し、資料の提供をお願いし、
了解をいただいて活用している。また、イは脳機能の
視点で実践者としてのオンライン研修に参加し、これ
は医学でない、教授でもない、現場の実践者からくる
説得感に納得して、資料の二次利用のお願いをし、快
諾を得て活用している。一部を紹介する。

愛着とは日々繰り返される素朴な営みである。(≠愛情)

- ・母親がいつも乳飲み子のそばにいて、絶えず抱いて一緒に過ごす
ことができ、家族や夫婦や共同体の絆もしっかりしていて、子育てを
バックアップしているということ。
- ・だから子どもは探索(チャレンジ)もできる。



ルーマニアのチャウシェスク政権崩壊③



特に幼少期の
生まれつき × **育つ環境**
=**発達の問題**

愛着形成に問題がある思春期の行動特徴



発達障害が生まれつきだけでなく、育つ環境で左右

されることの現実が資料とともに提示して説得力があ
るとともに、その対応には、諦めない！と呼び掛け
ると、先生方の共感を得た。

脳機能の視点

- 脳機能の準備が整っている子は、わざわざ注意・叱責・低評価を受けるような“割に合わない”ことはしない。※同調圧力が働く集団であれば尚更。
- 不適切な言動を繰り返す子は、課題クリアに必要な**脳機能の準備**が整っていない。

✖できない ✖やらない ✖スルー ✖逃げる
✖不機嫌 ✖文句 ✖反抗(に見える) ✖攻撃(に見える)
すべてSOS

保育・教育の究極の目的は

【保育・教育の目的】
自ら前に進もうとする姿勢を育てることではないか。

【自ら前に進む姿勢が育つ条件】

- ①受け入れられている安心感
- ②当たり前のことが当たり前にできる小さな達成感の蓄積

他児と同じようにできないが、難しいことはわかる・できることもあるので、誤解を受けやすく注意・叱責・言い聞かせて対応されることが多く、自ら前に進む**条件を得られない**。

無理をさせず甘やかさないハードル設定

- 脳機能視点の要因を踏まえ、**無理をさせず甘やかさない**ハードルを設定する。

【無理のあるハードル設定】

- 自動的な年齢相応の設定や支援者の願いによる設定。

【甘やかしのハードル設定】

- 本人の脳機能の準備性以下の設定。
知的障害があったり言動が不可解過ぎると、うまくいかない要因想定なしに、力量以下の設定をされることが多い。

このアとイに関しては、家庭環境による影響が大
きいことを示すとともに、支援者の適切な指導支援の
大切さも感じることができる。

(2) のコにある佐渡地区特支研講師は、自ら志願し
て80人を前に上記2つの資料を盛り込んで、2時間
の研修会を行った。途中合間合間に「笑顔と対話タイ
ム」として参加者同士の対話時間を設けた。研修を振
り返ってで、「同じ悩みを抱えていることが、対話の
中で分かって良かった。」「内容が盛りだくさんで、
一つずつもう少し時間をかけて聞きたい」などと寄せ
られた。

4 成果と課題

具体的な実践の成果として相談件数の増加は確認できた。ただ、センター的機能として、特別支援教育の充実や特別支援教育に対する理解を深めるといったものを数値化することが難しいところである。

ある先生から「相談がしやすくなった」「オープンな雰囲気がありますよね」と肯定的な声を聞くとありがたい。

また、コンサルテーションした学校の先生方から「分からないことで、どうしたらよいか迷っていたけど、こうすればいい！と道筋が分かると肩の力が抜けて日々の指導支援にあたれそうです。」「参加して良かったです。ありがとうございます。」と言っていたくということは、最大のセンター的機能の充実ではなかろうか。

上記の肯定的評価をいただくには、実践の中でも触れてきた「笑顔と対話」を中心とした特別支援学校側の発信が不可欠である。顔の見える関係、信頼できる関係には「笑顔と対話」をキャッチコピーに今後も推進していきたい。

今後の課題として、現場のニーズに応えられる特別支援学校側の専門性も問われてくる。現在は、発達障害についての対応が中心で、今後も新たな知見が出てくる可能性もある。良かれと思っていたことが子どもたちにとって悪影響になってはいけない。日々の業務の中にトラブルは付きもので、そこをチャンスととらえ、「笑顔と対話」で前に進んでいく研修を続ける職場環境でもありたい。

5 おわりに

特別支援教育の理念である共生社会の実現に向けて「笑顔と対話」を核にセンター的機能について述べてきた。以下の講演資料が当校の特色ある実践として掲載し、今後もあきらめない覚悟である。

令和6年8月21日 佐渡地区特別支援教育研究協議会 夏期研修会

佐渡地区センター的機能キャンペーン

「特別支援教育の 諸課題にすべて答えます！」

～視点を変えれば支援も変わる～



県立佐渡特別支援学校
川沼 正憲

佐渡地区センター的機能キャンペーン

「特別支援教育の諸課題にすべて答えます！」



- 発達障害（脳機能の視点）
- 問題行動（脳機能の視点）
- 集団不応（脳機能の視点）
- 諸計画作成（指導計画、支援計画など）
- 交流学級と特別支援学級（担任と介助員など）
- 家庭、関係機関との連携（共生社会の第一歩は）
- 保護者との連携（共生社会の第一歩は）
- 中卒、高卒後の進路（正しい情報を知った上で）

佐渡地区センター的機能キャンペーン

「特別支援教育の
諸課題にすべて答えます！」

正解が一つなんて

ことは、ないんです！！

佐渡地区センター的機能キャンペーン

「特別支援教育の
諸課題にすべて答えます！」

そうです！



笑顔と対話で

共生社会の実現へ

ありがとうございました。

新潟県立佐渡特別支援学校

TEL: 0259-22-2145

メール: school@sado-tk.nein.ed.jp



相談が必要なお子さんがいましたら、支援者の方からでも良いので直接電話をください。喜んで対応いたします。なぜなら、そこから

何かできそうなこと 考えてみませんか！

大人が変われば 子どもが変わる！

そして笑顔あふれる共生社会へ！